

学術メディアセンターだより

暑かった夏は去り、段々と冬を感じさせる季節になってきましたね。コロナの影響により、思わぬ形で過ごす時間が多かったと思いますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？ 今回の映画化作品、本屋大賞をはじめ、他にオススメしたい本をとりあげました。是非お手に取ってご覧ください！

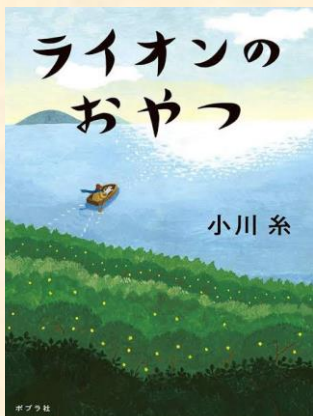
TOPICS

P1
2020年本屋大賞
P2~3
おすすめ本紹介
P4
映像化作品

学術メディアセンターだより 9号
通巻62巻 2020年12月(冬号)
順天堂大学医療看護学部
学術メディアセンター運営委員会
〒274-0023
千葉県浦安市高洲 2-5-1
☎047-335-3111

2020年度 本屋大賞

全国の書店員が一番売りたい本を選ぶ本屋大賞。今年度のノミネート作品が発表されました。今年度の小説部門の大賞は風良ゆうの『流浪の月』。皆さんはもうお手に取りましたか？今回は惜しくも大賞に選ばれなかったものの、ぜひ読んでもらいたいノミネート作品をご紹介します！



ライオンのおやつ
小川 糸
(ポプラ社)

主人公は海野雫、末期がんで余命を宣告された33歳の女性。残された期間を瀬戸内海のホスピスで過ごすことを決め、「ライオンの家」にやって来る。心地よい気候、美しい景色の中で、今までの人生を振り返り、本当にしたかったことを考える。「ライオンの家」では、毎週日曜日、入居者が生きている間にもう一度食べたい思い出のおやつをリクエストできるという「おやつ時間」があった。雫は毎週この時間を楽しみにしていた。雫は、「ライオンの家」や島の人々とのふれあいを通して、残りの日々を精一杯過ごす。そんな中、病は徐々に進行し、身体も自由も効かなくなり、病室で過ごすことが多くなった。そんな中、ついに雫がリクエストしたおやつが「おやつ時間」に出てきた。一日一日を大切に生きることの大切さを感じる一冊。

本のタイトルの強烈さから既に早見ワールドが始まっている。この作品はとある本屋で働く契約社員が、非「敏腕」店長に振り回されつつも、目の前にある仕事に奮闘していく日常の物語だ。本来であれば「ただの仕事の愚痴」で終わりそうな内容だが、早見ならではのテンポの良さやライトな文体が作品としてまとめ上げられており、リアルだけれども読みやすいお仕事小説として仕上がっている。本屋ならではのあつちや仕事の不満をコミカルに表現している作品であるとともに、仕事とはどういうものなのかということに迫るような作品だった。個人的に4章の「神様がバカすぎて」が共感の嵐だったので、アルバイトでの嫌なことや理不尽な出来事を笑い飛ばしたくなったら読んでみてほしい作品だ。



店長がバカすぎて
早見 和真
(角川春樹事務所)

自粛中に読んだおすすめしたい本

今年は家にいる時間が多かったですね。みなさん、自粛期間中に本は読みましたか？今回は私たちが自粛中に読んだ4冊の本を紹介するので、是非読んでみてくださいね！



強運の持ち主 瀬尾まいこ 文集文庫

この本は占い師であるルイズ吉田を中心に繰り広げられる温かい物語です。ショッピングモールの端に店を構えるルイズの元には色々な人がやってきます。占いといっても話術を活かし、悩んでいる人の背中を押すのがルイズの仕事でした。本作は四編から構成される短編で、初めに出てくるのは「お父さんとお母さん、どっちがいい？」と相談に来る男の子です。困ったルイズは男の子の両親を調べていくうちに、ある事実を発見します。その他にも物事のおしまいが見えるという青年や、何回占いが外れても訪れてくるクールな女子高生が登場します。誰かに背中を押してほしいと思うことは誰にでもあると思います。そんな人々の生き方や選択をルイズとともに考える一冊です。さらっと読むことができるので通学通勤のお供にぴったりではないでしょうか。

紛争地の看護師 白川優子 小学館

今回、私が紹介する本は白川優子の『紛争地の看護師』です。この本は、国境なき医師団の一員として、実際にシリアやイラク、イエメンといった紛争地で活躍している看護師の体験記です。想像もできないような紛争地の悲惨な現状が語られており、そんな現状に対し、筆者は恐れを抱いたり、挫けそうになったりしつつも悠然と立ち向かっていきます。決して安全とも清潔とも言えない医療現場の現実や、現地の人々の悲痛な声、テレビの報道では知ることのできない世界がリアルに伝わってきます。彼女の夢を追いかける行動力や、国・国籍・人種を超えたチーム医療など、国境なき医師団に興味がある方もそうでない方も、看護師を目指す立場として学ぶことがたくさんあると思います。是非お手に取って読んでみてください。



『罪の余白』 芦沢央 角川文庫

今回は私が自粛中に読んだ本を紹介していきます。私が紹介するのは、芦沢央の「罪の余白」という本です。この本は、2015年に実写映画化もされている心理サスペンスです。冒頭では、1人の女子高校生が亡くなります。その父親と、死に追いやった人物の織りなす真意を隠しながら行われる心理戦は読んでいるとハラハラしてページをめくる手が止まりません。特に、たった1人の娘を失ってしまった父親の真実を明らかにするという執念や娘を死に追いやった人物への復讐心は読んでいるこちらまで緊張してしまいます。また、1人の女子高校生を死に追いやるに至った経緯やそれぞれの心の葛藤などの登場人物達の心情にも目が離せません。是非、手に取って読んでみてください。



『さよならドビュッシー』 中山七里

宝島社文庫

今回紹介する本は、中山七里の『さよならドビュッシー』です。ピアニストを目指す主人公の遥は大火事によって祖父や従姉妹を失い、自身も奇跡的に助かったものの全身大やけどだったため、皮膚移植を受けるも体を動かすだけでも強い痛みを伴います。そんな絶望的な状況にもかかわらず、夢を諦めずにピアノのレッスンを続ける彼女に私は心打たれました。また、ピアノの演奏部分は細部まで描かれていて、まるで自分がその場で演奏を聴いているかのような迫力が感じられます。このような音楽要素満載の物語の中に、祖父の遺産を条件付きで相続することになった遥の周囲では不幸なことが次々と起こり、ついには殺人事件まで起きてしまうといったミステリー要素もあります。誰が、一体どんな手を使って犯行に及んだのか、最後に解き明かされる衝撃のトリックとは？是非お手に取って読んでみてください。



2020 年映像化作品

寒くて、中々外に出るのが億劫になるこの時期に今年おすすめの映像化作品を紹介したいと思います！



『罪の声』 塩田武士 講談社文庫

この本の主人公の1人である阿久津英士は、大日新聞社に勤める新聞記者である。阿久津は、上司により昭和史に残る未解決事件である「ギン萬事件」取材し、30年目の真実として記事を書く様に命令された。一方、この本のもう1人の主人公である曾根俊也は、テイラーを営み平和な日常を送る人物である。俊也は入院した母に頼まれた物を探している時に、父の遺品であるカセットテープを発見した。しかし、そのカセットテープは「ギン萬事件」で使用されたものであり、その声は自分の声だった。

未解決事件の犯人はいったい誰なのか？、自分の父親は犯人なのか？、事件を追う記者と被疑者家族の両者が、事件の真相を探りに動き出すサスペンス小説である。両者が一步一步事件の真相に迫る展開に胸の鼓動が高まり、その真相に涙が出る、そんな様々な感情を感じられる作品だ。

是非、映像化作品とともに読んでもらいたい一作である。

『流浪の月』 凪良ゆう 東京創元社

認められない恋愛、異常愛これほど悲しいものはありません。わたしが紹介する本は「流浪の月」という社会的にも誰一人からも認められない中でお互いを求め合う男女の恋愛小説です。男子大学生の文は当時小学四年生だった更紗を誘拐監禁するところから、始まります。世間体から見ると完全に文が犯人で更紗は被害者のように見えるかもしれませんが、しかし、全ては更紗の同意の上なのです。このときから少し異常な関係の予兆がします。しかし、この物語はこれだけではありません。段々とお互いの姿や形が露わになっていき、恋愛とはなにか。男女とはなにかを教えてくれる素晴らしい作品になっています。是非手に取ってみてください。



～編集後記～

今年の学術メディアだより冬号では、2020年本屋大賞、自粛中に読んだおすすめしたい本、2020年映像化作品に関する本について紹介しました。今年は新型コロナウイルスによる感染の影響で、様々なことが制約され、残念に思う時間も多かったと思います。しかし、本を読んだり、好きな映画を見たりと自分の好きなことに時間を使えたと思う人もいるかもしれませんね。この時期にこの学術メディアだよりをきっかけに、好きな一冊に出会ってもらえると嬉しいです。最後まで学術メディアだよりを読んで頂き、ありがとうございました！